

女人禁制と高野山

坂口龍道

「女人禁制」と云ふ語は高野山發祥の標語である。では高野山とは、其の今昔を見れば、高野の俗人は昔は寺院の長屋に住んで俗用を足してゐたのだが、後世需用の多くなるに従つて不便を感じ、別に居を開く事になり、單に一山の需用のみならず、周圍の物貨集散所として、人家も年々著しく増加して來た。今や山上に街をなし、町制を布いて高野町と稱し、賣店料亭と共に人家軒を並べ、最近の調査によれば山内戸數一千三百七十五戸、山内人口七千九百七十五人、寺數百二十三寺、僧侶七百八十五人、鬱然たる山上の街である。普通の旅館は無いが、五十有餘の子坊が宿坊とよばれて諸國よりの參詣者を宿泊せしめて居るし、鶯谷の一角には自由區域と稱し遊び屋までも出來てゐる。御存知の如く高野山は長い間、女人の入山を禁制し、宗教的靈域として神聖視されて來たので、その爲に古來幾多の悲劇が醸されて來たものである。就中、石童丸の哀話は最も人口に膾炙して誰知らぬものもない。一例であるが、此の禁制は實に厳しかつたもので、「此世をば我世とぞ思ふ云々」と豪語した御堂關白藤原道長の權勢をもつてしても如何にもする事が出來なかつた。道長の息女が二歳になり、行く／＼は皇后にも立たんと思はれてゐたのが、僅かの患の爲に呼吸が絶えたので、餘りにも悲しく思ひ、如何にしても助けん、息女の屍を錦の袋に入れて己が頸にかけ、高野山に登り、聖僧の法力を頼まれたが幼くはおはせぎも女人なればきて、道の道長も總門の内へは入れず、門外で加持したのである。幸に息女は蘇生して、後に皇后に立たれて上東門院と申された方である。かほご嚴重であつた禁制も、時勢の力には勝つこゝ叶はず、時代につれて女人の禁も解かれて今は昔の物語となつたのである。では今少しその時代相について書いてゆかう。

その前に女人堂につき記せば、高野山登山道は古くは七口ニ稱し、大門口、不動坂口、龍神口、大瀧口、相浦口、大峰口、黒河口の七つがあつたが、今は只不動坂口の堂のみが残つてゐるだけである、他の登山口は物好きの探勝家の外は辿つて見るものもなく今は多く忘れられてゐる。併し昔の參詣本道たる大間口には今も堂々たる大門が屹立して聳え古の參詣は皆この大門を潜つて山内に入つたのである。所謂一足三禮の行幸路である、山麓九度山町の西部に慈尊院がある、そこより南山路を行き、矢立辻に至り東に折れて大門を入り金堂に至り、奥の院につく。この間一町毎に町石が立つて居り、慈尊院より金堂まで百八十本、金堂から奥の院まで三十七本合計二百十七本即二百十六町（六里）である、その道々には袈裟掛石、捻石、鏡石その他千古の舊蹟が數多残つてゐる、一方不動坂口の女人堂はケーブル終點高野山驛から東南約一軒、不動坂を上りつめた所の左傍にある。即高野山バスの終點である。高野山は大師開創の時から女人禁制が明治初年まで嚴重に守られてゐたので、婦人は此堂に詣で、山上を遙拜して下山せねばならなかつた。西行の妻も、石動丸の母方も、其他數へ切れない女性の哀話を遺した所であるそれが明治五年太政官布告を以て一般結界の禁を解いてから、自然に堂も廢されたが、この不動坂口の堂のみは往時の面影を存し、本尊大日如來を安置して居る。

罪ふかき名にはたてれど女郎花

女人堂をも踏みこえて咲く

さはりある花の名だてか女郎花

いかで高野の山に咲らん

父母のしきりに戀し鶯の

三密加持の深山にぞ鳴く

ではその大師御在世の時代相と女性を述べんに、山上清澄の泉も百里の末には黄濁の川と化す。花に戯れて餘念なき

狂蝶の一生にも比すべき、日常生活を営んだ平安人士の思想を左右した、奈良佛教もいつしか經典に則る事なく、別に存する所の宗教道德も制裁の力なく、無方針、無節制、放縱にして淫靡なる頽風爛俗の社會に、面目を一新せしめたものは何といつても最澄大師と空海大師の、布かれたる思想であつた。

空海大師は人も知る、眞言密教の完成者、高野山の開山にして日本文化の母として今もなほさかに景仰欽慕されてゐる、一大宗教家である、大師は國家鎮護、濟生利民の勝計に餘念なく天長九年に云ふ年に早くも高野山へ三世を遁れ山上清澄の泉に、黃濁の垢を濯ぎて修道院の構へに又他を顧りみなかつたのだ。そしてその聲明、高野山入山四至結界實に一千有餘年はをろか、五十六億七千萬年の未來のズート未來、龍華三會の曉、彌勒菩薩この世に下生まします、末の世までを一貫しての結果であつたのである。

この未來際を盡してまでの結界の御聲明は煌として日月の如く一步も近づく能はざらしめる感があつた。其の文に曰く、

「沙門遍照金剛、敬んで十方の諸佛兩部の大曼荼羅海會の衆五類の諸天、及び國中の天神地祇並びに此の山中の地水火風空の諸鬼神等に願す。——中略——この故に、天皇陛下特に恩寵を下して、此の伽藍の處を賜へり、今、上は諸佛の恩を報じて密教を弘揚し、下は五類の天威を増して、群生を拔濟せんが爲に、専ら金剛乘秘密教に依て兩部の大曼荼羅を建立せん願ふ、仰ぎ願はくば諸佛歡喜し、諸天擁護し善神誓願して、此の事を證誠し給へ、所有東西南北四維上下七里の中の一の惡鬼神等は皆我が結界を出で去れ、所有一切の善鬼神等の利益あらん者は、意に従つて住せよ、又願くは、此道場は普く、五類の諸天及び地水火風空五大の諸神、並びに此朝の開闢已來の皇帝皇后等の尊靈一切の天神地祇を以て檀主とす伏して乞ふ、一切の冥靈晝夜に擁護して此の願を助け果せ」(性靈集第九)と

『正法を護る者意のまゝに住せよ、正法を破るものは悉く結界より去れ、我がこの山は、上は國家の御爲、下は諸の修

行者のため、上は諸佛の恩に報じ、下は五類の天威を増し、群生を利濟せんがための道場であるぞ」この御言葉。この御山に入山せる意趣も、山はとも云ふべき、高野山の主義が、空海大師の思想躍如たるに共に、この御山を泰山のやすきにいたここになつたのであります。空海大師の思想そのまゝを具體化した高野山の其後、修道院も云ふ名で以て生れいづる惱みの第一歩に現はれたるものは影の形に随ふが如く、つき纏ふ人間性の魔衆たる女性のそのものであつた。

先づ空海大師と母上とがこの高野を場面としたエピソードがある。

x

x

x

「御母阿小屋（又玉依姫ともある）は八十三の御時であり、大師は御年五十九歳、丁度天長九年の時であつた、母方は高野へ大師を御尋ねあつて御登りあり、六十町麓の矢立坂に云ふ所に着いた時、大地さけて五尺も地がめ入りこんだ其の上火の雨が降る、大師は火の雨のふり事は何かあつたにちがいないこの給ひて麓へ御下りになり見給へば、八十餘りの尼公が寒熱湯に物すさまじくまじられて、五尺も大地に入つて居る、大師、母方なる事を知らず、大に腹を立て給ひて申さるに「此山は業障の女人は影もさゝず、惡業の輩は此山に運ぶ事なし、男子は一度參詣すれば、無始の罪障道中に滅すま誓ひ給ふ、況や此峰に一度望む人は往目を悦ぶべし、もだしてやみなん人は前業を恨むべし」「この處に御あがりある女人は不審なり」に仰せ給へば、尼公答へて「我子に空海を申す者、この山にて御僧に成られし由を聞き是まで尋ね登りしが女人のあさましさは業障三執の大苦惱を受けました、さうか貴僧の御方便を以て御たすけ給へ」に仰せられれば大師大いに驚き、「如何なる御事か我こそ空海を申す法師にて候へ、此山へ御供申度もこの山は八葉の峰、八の谷、尊三ヶの別所、四ヶ院内七里結界清淨涌出の御山なり、峰には金胎兩部を形ざり、谷には眞言秘密の獨古を割て沈め三十七町に三十七尊の種子を顯し、金剛界九會の佛德を表はす、下より青面金剛の御頭に頂く山なり、金剛界胎藏界の曼荼羅を敷き奉りたる山にて候故麓へ御下らせ下にて見參申すべき事を仰せられしが、母方幾度か請ひ奉り「妾は登

るべき由有り、其故は妾は一生不犯の女人なり、御身をもうけ奉る事は三寶御あたへの子なり、自は八十三に罷り成りしが四十二歳より日數を見ず、四十二年このかたは貴僧の如くにして、御山をけがし奉る事ある間敷き由をのべ仰せらる、大師此に、父命を背くは白骨を抜き取り、母の恩を背けば赤肉を抜き取す事故母の仰にそむかば不孝」ミ終に御供申す、そして一條件を出されて「若し一度にも奇特あれば御供申す事出来にくき事仰せられ御かけしてある九條の御袈裟を四尺四方の石に御かけし、此上をお越へあるべし」ミ申される、尼公大いに悦び給ひ越へ給はんミする時月水落ち、忽ち御袈裟は火焰ミなつて燃え上り石は八方へ碎け散り、尼公は十重の地の池に沈み給ふ云云」(弘法大師高野山開山縁起)此に於て母上も入山を思ひ止りて麓の慈母院村に住み給ひ、御子が住み給へる御山を朝夕拜み暮したミか。この母子の間における、修道院ミしての高野山を場面ミした物語りはかくの如くによつて女性を一步も不可入の神秘的實證譚ミして考へねばならぬ。

修道院ミして大師が建てられたる高野山は是非女人禁制でなくてはかなはぬ、時代的色彩ミ、經典の金言煌ミして動かす能はざるものがあつたのでなからうか……………

經典の金言ミは、六波羅密經に「女人は親近すべからず、若し猶ほ親近すれば善法皆盡く等々」

この金言の遵奉者「トラピストマン」ミして三密瑜伽の行業を勵み給ひし大師は女性がこの御山をけがすここに對し末の末まで末徒の警拆ミして女人禁制を誡め給ふたのである、されど一面、人間ミして、大師は女性に對してかくの如き峻嚴の態度を示されたのだらうか、和面昵言は勿論の事、所要の使者ミして他より入來のものたりとも僧房に一步も入るべからず、戸外より返歸せよミは何たる峻烈さであらう、何たる冷酷な事であらう。

これが修行の難たるが故であらうか、……………

現代にても女人「トラピスト」には男子の入るを禁ずること、女人禁制の昔の高野山にもまさるミ聞くからには、こ

の時代大師が時代的思想の革命者として設けられたる高野山にかくも峻烈なる警誡をしめされたのは是非なきこゝからであるまいかと思はれる、でもかくまで女性を冷遇せずともよさうなもの、——でも之はたゞ末徒教養の修道院としての一面觀にすぎない一方便の規定であらう——こゝは異なるか。大師の御性格の全面は、かくの如き狹量のものではあらせられぬ。

此に一つ四寸岩を云ふものを紹介しよう。高野道の表て口には、母方がわが子の居ます山にのほりしも女人禁制の佛戒に阻まれ目的を果したまわず引き返したる傳へられる「袈裟かけの岩」があり、裏口には大師が母君の安否を煩ひたまひて日に九度びも山を下りて尋ねたまひしる傳ふる九度山を八十丁ばかりすぎ神谷の宿に登りたる附近にこの「四寸岩」を云ふのがある。

傳に云ふ「弘法大師のみ足のあこ」を。

一度高野山に參詣すれば、無始以來の罪障は道中に滅す。このみ山に杖を曳くもがらは必ず大師のみ跡を踏みまして千載萬歲過去世より、知らず識らずに造りし罪咎を一度に消え、南無大師遍照金剛を唱へて登る稱名の聲、今も谷間に呀ましてありがた涙に咽ぶ大師讃仰の善男善女は數限りなくある、罪障消散の四寸岩として物語りをつたへてゐる床しき語り草である。

又傳には、この岩は女性が仰臥の姿にてその寢姿の上を踏み登るにされ、人間生成の難所はこゝにあり、又神祕のみ山の第一の難所は又こゝにありとされる、この難所こそ人間煩惱の初祥點にして、この難所を越えざれば極樂の聖地に至る事もかなはざるべく、この難所を踏まざれば諸佛雲集します山に入る事もかなはざるべく、煩惱斷盡の極所をこゝにきめんと造化の妙のなせしこゝがら古老が教へてゐる。

四寸岩とはなぜか聞けば、そは大師のみ足は踵より指さきまで四寸ありしか、又はみ足のあこかたの間が四寸あ

りこか傳ふるが眞か疑か……。

煩惱斷盡、降三世明王が右足を高くあげて仰臥して驚きにみてる王妃鳥摩の乳房の上を踐みて、煩惱障にかたぎれるを蹴る勇猛精進の實姿こそ、この四寸岩に相應しき傳説なるべきであります。

密教にいふ降三世明王は、右足に煩惱障たる鳥摩妃を踏み、左足を高くあげて所知障たる、傲慢者大自在愍王を躡み去る精進の勢を表現まします聖容なるが、今この四寸岩の鳥摩妃たる女性仰臥の上を躡みて神秘のみ山にわけのほる有様は、丁度降三世明王の三昧に入りての修業さ心得べきもの、女性は蛇性の如く執念深きものとして登攀第一の難所にて斷ち切りおかざるべからずこの具體化せるものはこの四寸岩の關所、煩惱斷盡の試練場所を此に定めんこの誠めある語り草である。

かくて表口と裏口ともに女性排拆ばかりのようであるが……そこには、若き女のもつれ髪、こくにさかれず謂ふにいはれぬ、女性愛護の反面が濃厚に秘められてゐる……。岩さ女性！ かたきものさやはらかきものこの融合、柔さ剛さの對比の鮮かさであります。

この四寸岩に、修業を積みてのほりくる沙門の來山を、まちわびたまひしは丹生津姫ニフツと申す山の神、これは又この女人禁制の高野山に不思議にも地主の神として崇めまつられる神である、今この丹生津比賣ヒメの素性を一寸見て見る。

紀伊内生明神は高野山の神なり、弘仁七年沙門空海、高野山に登つて路に迷ふ時に、神女出現して海に導き、福地を示す、その神女は丹生明神なり（神社考^{十四}左）又女神なる事を

一、に丹生明神は天照大神の姪で日續フタツの御子と云ふ説。（淡路千荒寺縁起・神社考）

二、に丹生明神は、丹生都姫で、天照大神の妹、稚日女神ワカヒメノカミと云ふ説（丹生明神縁起、天野社記、講式、神名帳冠註）

三、に諸子岡象女神と云ふ説（本朝年代記）

又弘法大師この御山に迷つて導かれたもこの女神の前にのべし如く又、降つて承元年中行勝上人、世慮を忘れて念誦讀經の折からに現はれたまひしもこの女神、又、應永の頃、實性院宥快法印、悉曇の抄物御製作に、餘念なく、その註釋に、なやまされつゝある時に、魚腦の燈籠を持して影向させ給ふたのもこの女神であつた。

又春山煙り細き朝に、住侶が一鉢の空しきを憐みたまひては、眷屬群神を都鄙に派し、秋嶺風烈しき夕べには、山僧が三衣漸く破るゝを悲み十二王子を遠近に赴かしめ高野山護法のために、吾が足かけて血を流したまふ云ふもこの女神勤めなくして、空しく信施をうけ、睡眠をむさほる者、色を好んで見愛に入り、學なくして住するものには、暗に治罰を加ふるものに啓したまへるもこの女神なり。

山の神が啓したまへるこの治罰の誨めは、四寸岩の物語りを忘れぬよう、入山の善男子、善女人は登攀第一の難所にて、併しこの治罰有無の具象化にあひながら……降三世明王の本誓を忘れて、一度參詣高野山無始罪障道中滅は、昔のこゝ、幾たび参詣し、はては常住入山して聖地の土に、今日よ明日よ尋ねあるきてありし往昔の女性栖住をかたくこがめ給ひしこのみ山に、男女性に絡まる昨今の悲劇喜劇を以て充されてゐることは、よいこゝか悪いこゝか……。

かくも清冽たりし高野山は、百年末、遂に黃濁漲る川に化し終つたのは、法の滅盡を示すのか、又時代思想に押し移り行くのか、併し高野山の意義使命は、時代より時代、過去より未來、未來より未來へ移りつゝある、歴史上には「女人禁制」に反對なる事實が數ず限りなく顯はれて、女性がこの御山の文化藝術思想に貢獻せるこゝのかずくがいやが上にもまさりつゝある實證に驚かされてゐるのは因縁不思議といはねばならない。

まして禁を解かれたのち、住山せる自覺ある女性の活動は一入目まぐるしいものがあり、近く法性のこの淨土に、女性教養の學園をも開かれんこの議もほのかに聞いてゐる……高野山の使命といふものは時代と共にがらりこくつが

へり「男子禁制」の禁令を設けねばならん様な將來がこぬとも限らぬ。

もう少し、この高野精神の發現上に隱顯し來れる、女性のおこをたすねよう。

先づ西行所見云ふものを。

いづくにか身をかくさまし厭ひても

うき世に深き山なかりせば

×

×

×

花鳥風月も亦、佛道修行に妨けあるを思つて、漂浪の身となりはてたる、西行は一介の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、西北にさすらひ、自然を友として悠々自適、遁世して高野山へ隠れ家を求めたのである、時は保延六年、歳廿三歳であつた。

高野山は四面高嶺、深山幽邃人蹤徑絶之、四時世塵を離れた仙境である、伽藍地三昧堂に、觀佛三昧に、三密瑜伽の觀想をこらしてゐたのであつた。

恰かもこの大自然の景趣は西行法師入道遁世の心情と蓋函相稱さやいふべきものか、世常の櫻花は、既に散りそめても、西行入山の高野山にはほころびる云ふ景趣は、「浮き世の春を遁れてぞ咲く」歌はしめたのであらう。浮き世をば遁れて、この靈境に、三衣一鉢、解脫同相の衣に、三密瑜伽の妙行を練磨しては、喜怒哀樂よりのがれ得て

行く水に思を流し飛ぶ雲に

心を乗せし我が世歌はん

この妙境は、この南山の大自然の景趣そのまゝにさしたのだらう。

併しもごぎり切りはて、いみじき歌人となり、高野に登りて法師となつた云ふも、一度最愛の妻子を棄て、世のあ

じきなさを悟り、超然として世塵を脱却して、名聞榮利を外に、全く山川の間に一身を浮沈せしめた西行にも一片耽たる愛着にまこわれたる思念は容易に斷たれなかつたであらう。

其上棄て置きし妻子は、良人のあさを戀ひ慕ひ、はる／＼此處に尋ね來て、今は三里麓なる、天野の里に住ひをこり日夜良人に逢ふの日をまち侘びるゝの便りを耳にするのであつた。その度ごとに觀佛三昧に餘念なく、閑雲野鶴を友として、解脫同相の衣を着、三密瑜伽の窓に、四曼不離の覺月を觀する行業にのみふけりつゝあつた西行法師も、時ならぬ心のぎよめき、さわがしさを感じた事であらう。其の時は三諦止觀の月を眺めてはいかに心の琴線に鼓みうつた事であらう。

一方去られし良人や今いづこか、雨の朝、風の夕べ、忘れんとして忘れがたく、女性のかよはき足にて紀州路さして歩みを運びしもあわれである、でもやつ／＼麓に着きし妻子は明日は尋ねて良夫にもあへよう、幾年月かわりはて給ふた父の慈顔にも接し言葉もかわされよう、ご入山の道すじを尋ねしにコハ又如何に、高野山は「女人禁制」いかに昔の契り厚き人があらうとも女性なるが故に禁を犯す事かなはず、昔弘法大師の母上が我が子の住める山故に登れぬ事はなしご矢立阪まで登りたるに罪障忽ちに現れ下山した事を聞かされ妻子の悲涙落膽は人の見る目もいたましいものであつた事と思ふ、でも二世を契りし良人、慕ひし父はこの山にあり、いつそ我等も尼となり共に佛道修業すること本懐ご、我ご吾が心に決し、天野の里に菴を結び行ひすませるも女人禁制にからまる悲劇である「女人禁制」の哀話が生んだ佛道修行の轉禍爲福のものがたりであらねばならん。

なく虫の草にやつれていく秋か

あまのに残る露のやぎりぞ

おもひ置しあさぢの露を分いれば

たゞ纔^{ワッ}かなるすゞむしの聲

(山家集)

次に阿淨律師の見聞をつゞらう。

高野の阿淨律師とは誰か、それはその人ありこ知られた、重盛公の侍臣、齋藤瀧口入道時頼の法名である。

戀ゆへに我も佛の道に入り

世を鶯の意をのみぞ啼く

建禮門院の雜司横笛を見染めてより、胸の騒ぎに、堪へかねて、夢め幻の現つし世に望みも戀も消え果てたる、身のまかすべき所をば「女人禁制」の高野山にもこめ、一心専念、佛の道につこめたのであつた。

そるまでは恨みしかぎも梓弓

誠の道に入るぞうれしき
(瀧口入道)

そるこても何か恨みん梓弓

引きこゝむべき心ならねば
(横 笛)

瀧口に横笛の戀の道行きはあまりにも人に知られてゐる事故、此處に省いて置く。

その瀧口入道が治承四年の七月にこの山に遁れ「女人禁制」なればいかに横笛慕ふこもこの山までは來られぬと思ひ入山したのであつた。戀ひこがれしはありし昔の事、今は三密瑜伽の床に圓頂緇衣の法師、かゝる心に雲もなし、思ひ入りての入山も、胸の思ひはへびの如く、禪定の庭に横笛の靈、驚きなりて啼くこは夢め思はなかつた事であらう。

いかに昔し、武勇にたけた瀧口こいへぎも心の敵には箭もたゝず、横笛死せしその後も生れかわつて瀧口の胸をさわ

がした事か、あゝ世をすてゝ山に入りしも、なほ浮世にからまるきづなは、二世かけても切る事かなはぬか、「女人禁制」の山に入りてもなほかなはぬか……こ。なげく心も、思へば斷腸の次第であつたらう。

彼瀧口もこの戀のために父祖傳來、武勇の譽れも高き瀧口の官位をも、六波羅武士の面目をも、父に背き、知友をすて、重盛公の恩義にも背きて戀の奴となり終つたのである。

五智無際智の月を觀る頼時の心に、いこも裂帛の思ひあらしめたる、女の思ひ蛇の如くこいひし昔がたりの執念さ、これで「女人禁制」に阻まれたる哀話でなくてなんであらう。

もう一つ記して團圓しよう

風にちるかるかや堂のけしの花

今道心こ蝶も尋ねん

×

×

×

石動丸をしるものは、高野山を思ひ、高野山を思ふものは、石動丸を連想する程に、それ程、高野山こ石動鷹こはきつてもきれぬ、「女人禁制」を背景として生れた、男女關係の時代的悲劇の物語りはあり得ないだらう……。

この石動丸の物語りは今なほ、多くの人にこやかく批評されてゐるものだが、これは歴史書の事實であつたこか、加藤繁氏は史上の人であるこか、ないこか、いはれてゐるが、そんな事實しらべはまあさうでもよい「女人禁制」を背景として生れた時代相だけを記す事にする。

丁度其の時代を見んこすれば其の時代の文學、遺物を知らねばならぬ如く、この物語りよりして、その時代世相を知る事はあながちむつかしい事ではなからう。

この物語りのあまりにも人心に、深く膾炙されてゐる事は、高野山の「女人禁制」こ云ふこはこの時代には

非常なる權威をもち民心の信仰をあつめ、あらゆる女性をして、高野山はぎれ程偉大なる清淨の山と思はしめてゐたか
こ云ふ事も想像出来るのである。

この物語りは丁度江戸時代の初期のものと思はれる、それは其の時代の高野山に對する將軍家の待遇やその時代風俗
をそれから、高野山の權威を、山僧の風儀よりして、この物語りが仕組まれたのであらうと思はれる社會世相であつた。
かくて高野山の山のありがたみが益々宣傳され、女人は一步もこの山に近づく事が出来ぬ清淨無垢の靈山である、こ云
ふこころをも合せて知らしめるに都合よき物語りであつたのだ。

現代にても、高野山へ參詣して刈萱堂に賽したものに、目のふちに、にぢむものをさうする事も出来ぬだらう、これ
は人情の機微をよく現した悲劇であつて、其時代の人の情も、今の人心もかわらぬ親子、妻子、男女間のこころがらび
ツタリこふからして涙をさゝるわけなのである。

「女人禁制」がこかれ、女人が棲住の自由なる現代でさへ、一度足をこの堂に這入れたものは「女人禁制」のこころが
らを忘れてゐても、石童丸の哀話に涙を絞つてゐる事實は否定出来ぬ人情の微妙なる動きを真に示してゐる、高野山に
しては又よき物語りであらねばならぬ。

それにしてもこれは實に「高野山」を「女人禁制」を背景として仕組まれた時代的社會相を雄辯に物語つてゐる男女
關係葛藤の悲劇である。

かくて高野山は又女性の物語りによりて山の靈光を一層發揚してゐるわけであるから尙一層力づけられてゐる事を
思ひ益々以て女性の力の不思議を感じずにはゐられなくなる。

女性の力、それには又幾多高野山文化の發達にはなつてゐる。あの多寶塔とその中の五佛は實に賴朝公菩提の爲、そ
の御臺所、二位禪尼政子が信心の結晶であり、又あの禪定院を建立されたのもそれである、又あの立石修福にもやはり

女性の貢獻してゐる事についても見のがす事の出来ない事實である、猶高野山第一番のあの廣大な高さ二丈五尺、臺石が八疊敷、まわり十四間四面に云ふ石碑も、駿河大納言源忠長が母の爲に建てたもので、昌譽大禪定尼の墓石である、其他ひもぎけば數かぎりない女性である。

思へば信仰の力はき永劫不滅なものではなく、女性の力はき偉大なものではなく、又不思議なものはない。

かくて「女人禁制」を標語として發祥した、高野山は、高野精神の發現をばその反比例に、女性によつてなしきられたかの有様になつたのは、時代思想の遷り變り是非ない事ではあるが之が眞に高野山、開山の意義發揚であるのか否かを疑はしめねばならぬ。

高野山の史實は、明らかに「女人禁制」を裏切つた事柄のみでみたまされてゐる、これが爲に、瀧口入道に横笛の哀話があまれ、石動丸の時代的物語りが生れ、西行法師の譚があまれ、あらゆる悲喜劇がこの「女人禁制」によつてのみ培はれて來つた、あさを見るに高野山の偉大を思はしめる傍ら「女人禁制」に云ふ事が、女性に如何なる衝動を施與したか云ふ事もジツト考へさせられる、かくの如く、あくまで女性を排斥してゐるかの如く見る女人入山禁令の山に、女性の血潮が流れてゐる事は不思議にせなくてはならぬ。世の中には表面に全然相違した事柄が行はれてゐる事がまゝあるが、高野山にも亦この看板に異つた、史實に充たされてゐる事に驚かされる。

かくて裏面にて仕遂けられてゐた女性の洪業を自由の今日一層に高野精神の上に加へ、大高野山文化、思想に、力ある生命の流れを注いで呉れる事を希ふと共に、女性にかわり男僧の昨今の活躍を見、猶彼等の精神文化の一層の導きを見て行かう。